

兒童樂園を訪ふの記

四四
四三

記 者

恐しく暑い日であつた室内の寒暖計が九十三度ばかりだつたから、何でも戶外へ出たら百度以上がものはあつたに違ひない。

市内電車を目黒の終點で棄て、彼は埃が煙のやうに舞ひ揚る權之助坂の方へと向つて行つた。

權之助坂の下り口に、赤いペンキ塗の立札が、路の左側に立て、あつた「兒童樂園」と書いてあつて、人差指がその方向を示してゐた。彼は扇をかざしながら、手巾で汗を拭き拭き、坂を下りて行つた。坂は片側往來止めで、工夫が鶴嘴を目に光らせながら道普請をして居る。紺碧の空に白い雲がもくもくと重なり合つてゐる。

駄馬がせつなさうな顔をして坂を上つて來る、栗色の毛並に沿うて、汗が幾筋もの流れを爲してゐる。片側しか通れない往來を一ぱいに塞げてゐ

る此の荷車の馬をチイツとばかり厄介な奴だと思つた彼は重い荷を牽き惱んで泣きさうになつて居る馬の眼を見ると、忽ち氣の毒になつて了つた、而して「馬も大變だなア」と思つた。……そんなことは何うでもいい——兎に角坂の中途まで來ると、兒童樂園のフラフが見える。青田のそよぎが見えて遠い森が見える。そこで郊外は青々として空氣が清く、誠に結構であるといふことになる。坂を下り切つて了ふと、路の右側に兒童樂園の入口がある。門衛のお爺さんは人の善ささうな笑顔を以て彼を迎へてくれた。暑さに閉口して、日向道ひなたみちを自じ烈かながら歩いて來た彼は門衛のお爺さんの優しい應對振りによつて尠からず慰められた。而して平生の善人的心持に逆戻りしながら兒童樂園の門を潜つた。

兒童樂園の構内は彼の豫想よりもずつと廣かつた。それで彼は樂園を訪ふの記なんてものを書くのは大變だわいと思ひ出した。要領を得たことを書くには觀察眼といふ奴を働かせながら蚤取り眼で歩かなければならない。それがこの濫氣には却々氣配りの要る油斷の出来ない仕事で並大抵のわけのものでない。何は然れ、園内を一まわりしてみる必要があるので、彼はスベリ山の麓を通つて植物園の前へ出た、それから動物の檻の前をいくつか通り過ぎて、小さな土橋を渡つた、土橋の下には睡蓮の花が咲いてゐた、鴛鴦が二羽涼しさうな顔を並べて泳ぎまわつてゐる。この小川の傍に大きな木造の建物がある、これが本館である。本館の後へまわると苗圃や稻田がある、稻田にはお百姓さんがせつせと稻を植ゑつけてゐる。この邊にはシーソーやスベリ臺がある。坊ちやんと嬢ちやんがお父うさんにシーソーの遊び方を教はつてゐる。瘦せた坊ちやんはシーソーが上へゆくととき、

如何にも險呑で仕方がないといふやうな顔をすゑる、お父うさんは側から「ホーラ、面白いだらう」と仰有る、でも坊ちやんは、一向面白さうぢやない。元氣のないこの坊ちやんをこの樂園まで遊ばせに連れて來られたお父うさんのお心持に彼はしみ／＼御同情申上げる。

何しろ暑いので、彼は引き戻して來て、土橋の傍に佇んで夢のやうな睡蓮の花を見て、ホツと息をついてゐた。とききなりキヤツ／＼といふ聲がする——御心配あるな、猿が啼いたのである。

猿は小川の近くの檻の中にある。かなり廣い檻の中に一人住ひをしてゐる猿はわづかの日蔭を求めて大勢並び横たはつてゐる兎と較べると、正さに別荘住ひの身の上である。

それにこの猿は非常に人氣者である。猿の人氣者である所以はまつたく猿が兎のやうに薄志弱行の徒でなく、山羊のやうに紳士の謙抑を氣取らず、鶏のやうに無定見な勞働を敢てせずに子供と共に

大いに元氣よく遊び戯れるといふ點にある。成程御近所の檻に居る山羊も鶏も兎も皆それ相應に子供に何物かを教ふるには違ひない、しかし子供の友達では決してない。

子供と戯れることの出来る猿は兒童樂園わがかりもの宥者である。子供の友達になるものは何よりも先づ子供の友達になれる性質を持つ者でなければならぬといふことはあまりに分り切つた話である。この點から行くと山羊や鶏や兎は子供の友達としてはなくもがなといふことになる。山羊は乳を供給すればいゝ、鶏は卵子を産めばいゝ、兎はと、一寸これは困るがとにかく何か外のことをした方がいゝ、その方が山羊的に、鶏的に、兎的に徹底する所以である。といつて山羊や鶏が兒童樂園には無用の長物であるといふのでは更々ない。子供の友達になれぬやうな人は早く子供の友達たることを辭職した方がいゝといふことを言ひたさにこんな餘計なことを言つてゐるのである。そこの所をお

間違ないやうに。しかし理窟といふ奴はこれをごねてゐる方は涼しいが、聞かせられる方の身にとると迷惑千萬なわけで、頗る夏向きでない。世の中に青い理窟がないと餘程結構であらうと存ずる。彼は自身でこのことに氣が附いてゐるのだからもう屁理窟は言はぬ了簡らしい。讀者諸君は幸ひに御安心あつてよろしいわけである。

さて、話は猿の檻のまわりに子供達が大勢集つてゐるところまで逆行する。猿が廣い檻のなかを自由自在に跳ねまわつてゐると、お母さんと坊ちゃんやんと嬢ちゃんぢやんがこちらへお出でになる。嬢ちゃんぢやんは忽ち猿がお氣に召して了つて、檻の前へ立つたまゝ動かない、しかし何うしたものか坊ちゃんやんは猿の傍へ行かうとしない、おまけに「早くむかうへ行きませう」と仰有る。お母さんがよく聞いてみると「猿が恐こわい」といふ。何時までも猿を見て居たい嬢ちゃんぢやんは大いに業を煮やして了つて「ほんとにあなた憶病ねえ」ときめつける、今日出

會ふ男の子は皆妙に憶病だわいと彼も思ふ。坊ちやんは「憶病ぢやないけれど猿はひつかくから厭だい」と言ふ。至極御尤な次第である。坊ちやんは男性の尊嚴のために一寸憤慨して見せた。

猿のところで大分停電して了つたが、彼はそれから樂園の北側の運動場へ行つてみた。こゝではぶらんこが子供衆の御意に適つてゐる。軽く涼しさうな洋装をした嬢ちやん方が威勢よく身を飄してぶらんこを漕ぐ。このぶらんこの傍に「このぶらんこは次の圖のやうにして拵へてありますから危険はありません」といふやうなことが書いてある。それを讀むと成程如何にも大丈夫に出来てゐる、これならば甚麽ことがあつても倒れる氣遣ひはあるまいと彼も大きに安心する。

それから彼は砂場の傍へ行つて、腰掛に腰を落して子供達が汽車のトンネルを拵へるのを餘念なく眺めてゐた。砂場の上には葦簾の屋根が張つてあるので、細い日光の線が凸凹になつた砂の上に

縞を刷いてゐる。自活の必要を自覺してゐなかつたならば、大人でも砂場に山を盛り上げたり、海を掘つたりすることは大いに面白いことであるに相違ない。子供の遊びに就てはいろいろの學説があらう。しかし彼は遊びは人間の一生を通じて失はれることのない現象であつて、子供の遊びと大人の遊びとの相違は、自活の必要を自覺しないものとしたものとの相違から生じて來てゐると考へるのが一番面倒臭くなくつてよかつた。……ホイしまつた、彼は又斯くの如く無用な考へに囚へられてゐる。

本館の窓からガラン／＼と振鈴の響が漏れて來た。本館階上の講堂でこれから講演が始まるといふ報知しらせである。

彼は講演を聞くべく本館の玄關口の方へ歩を運んだ。而して下駄を草履に穿き替へて螺線狀の階段を上り講堂へと入つて行つた。

階上の講堂はすべての窓が開かれてゐて、風通

しい。應がてドクトル・オブ・フ・ロン・キ・久保良英先生の「幼兒の遊戯」といふ講演が始まる。前回のお話の續きと見えて、今日は四歳頃から六歳頃まで即ち丁度幼稚園時代の幼兒の遊戯に就てお話しがあるといふ。お話の荒筋を次に記してみる。

幼兒の三四歳頃は個人的から社會的に、受動的から發動的に移る過渡期であるから、玩具もこの點に鑑みて選擇されなければならぬ。この頃になると男兒と女兒とはその性の區別によつて、その弄ぶべき玩具に對する嗜好にも相違をあらはして來る、即ち男兒は馬、劍等を好むに反して、女兒は飯事道具や人形を好むやうになる。尤も先年大阪の保育研究會で調査したところによると、男兒は劍よりも電車や汽車を好む者が多かつた、しかし女兒は矢張人形と毬とを一番多く好むといふことが統計の上から知られた。フレーベルの方法は今日では既に古くなつ

て了つたが、幼兒の發動的精神を誘導すべしと言つたフレーベルの言葉は實に千古不磨の卓見である。亞米利加では近頃コロンビア大學教授デュエイ氏の保育法が一般に行はれてゐる。デュエイ氏に依ると、幼兒の遊戯は幼兒をして將來の實際生活に順應せしめるやうに導くものではないといふのである。茲に水車小屋を作らうとすると、先づ實際の小麥や玉蜀黍の粉を入れる袋を作らせる。水車小屋が川側にあるといふので、床の上に白墨で川を描く、さてこの川を渡るのに橋が無い、それでは一つ橋を作らうといふことになる。そこで幼兒は床板を運んで來て實際に渡れるやうな橋を作るのである。斯くの如き手續を以て遊戯を行へば、幼兒は自己の作業の目的を知る、而してその目的に適應するために、如何なる材料を選び、如何なる作業を爲すべきかを、判斷し且つ實驗することが出来る。それ故幼兒は保姆から、橋とはこ

んなものだ」と注的に話されて、不明瞭な觀念を得るのと異なり、橋なら橋そのものを實際に理解するのである。……(略)……スタンレー・ホールは女兒の人形を愛するのは丁度偶像を愛するやうなもので、殆んど狂熱的であると言つて居る、doll と riddle とは語源的には違つた字であるが、發音の似寄りから斯う言つたのである。

それで日本には三月に雛祭りと言つて、人形のおまつりがあるが、これは子供のために甚だよい習慣である。人形を飾つたり、種々の供物をしたり、互ひに友達を招き合つたりするのは將來に對する準備を遊戯の内に爲すのであつて教育的にも非常に價值のある行事であるとホールは述べてゐる。

乍併、幼兒の遊戯といふものは、之を一面から觀察すると、種族發生の順序を個體の發生に於て繰返すのであると見ることも出来るのであるから、幼兒の遊戯は實際的價值を豫想したもの

でなければならぬとばかりも言へないのである。幼兒期の或る時期に於て、蝶を追ひ、蜻蛉を捕へるやうな遊戯が行はれるのは自然であり、あながち之を禁止する必要はないのである。

……(略)……田舎の幼兒と都會の幼兒とはその把持してゐる觀念の内容に於て著しき相違がある。それ故この相違を彼是融通して相等しきものとするためには玩具に依るのが一番よろしいと思ふ。即ち田舎の幼兒には電車飛行機等の玩具を興へ、都會の幼兒には自然物の玩具を興へるために時々郊外へ伴うて行き自然に親しませる必要がある。幼兒には十分の日光を興へて、出来るだけ自然と親しませなければならぬ。ホールは「自然と一緒にいる子供は光榮である、子供と一緒にいる教育者は光榮である」と言つてゐる。

久保先生のお話は大體これで終るのであるが、いろいろ統計表や何かをお示しになつて、非常に

有益な、綿密な御講演であつた。久保先生の次ぎには兒童致養研究所理事の成澤金兵衛先生が演壇に立たれた。講演の主題は「米國生れの日本兒童」である。成澤先生は米國に於ける日本人の狀態を具さに説かれて、移民問題や土地所有權問題や學童問題やに就て話を進められた。彼は先生が二重國籍問題を語られる時殊に多くの興味を以て聞いた。北米合衆國の法律では北米合衆國の國土内に於て産まれたものを米國人と稱して、之に市民權を與へることになつてゐる。然るに日本の法律は日本人の産んだ子を日本人と稱することになつてゐる。それで亞米利加に於て將來發展して行くためには日本人は何うしても米國の市民權を獲得して置く方が非常に便利である。市民權を得るといふことは即ち米國民となるといふことである、然るに日本人の子供は日本政府に對しても日本人としての届出をしなければならぬ。そこで國籍が二重となる、而してこの二重國籍といふことは排

日に傾いてゐる米國人等に日本人に市民權を與へることを拒むいゝ口實を與へることになる。現在に於て米國で生れた日本人の子供が市民たる資格を得る年齢に達してゐるのは尠い。それ故自然米國に於て未だ日本人の二重國籍といふことが喧しい問題となつてはゐないが、懸がてこれは大問題となるに違ひない、故に日本に於ては今の内に大いにこの問題を研究して置く必要があるといふのである。成澤先生のお話は大いに實際的のお話で國家對個人の根本問題から渦巻となつて湧き上つて來る一種の具體問題であつて彼の興味は深くその方へ惹かれたのであつた。

成澤先生の講演が終ると、醫學博士近藤乾郎先生の「兒童の肺結核」といふ講演があつた。先生は一般に肺病といふものに就て傳染系統、各期の症候豫防法、消毒法、治療心得等を話され、間々兒童の肺結核に觸れて行かれた。非常に分り易い有益な講演であつた。肺病患者の部屋はフォルマリ

ン瓦斯で消毒すること、肺病患者の咯痰は二十倍の石炭酸(石炭酸五、水九十五の割合)を入れた嗽壺にさせること、それでも微菌は一晝夜位は生きて居ること、石炭酸や何かの用意がなかつた場合には患者の痰は便所の中へ棄てるのが一番いゝこと(他種の有勢な微菌のために肺病の微菌は亡ぼされて了ふ)。患者の用ゐた器具類は煮沸すれば微菌は全部死滅して了ふこと、衣類や何かはこの頃の炎天なら裏表をかへして一日強い日光に當てたならば大抵微菌は死ぬこと、すべて肺病の微菌は熱に對しては弱いけれども寒冷に對しては、かなり強く、雪の中に埋めて置いても容易に死なないこと、肺病は初期ならば必ず全治し得るもの故癒る事をよく確信して根氣強く治療を続けねばならぬこと、第一期肺炎加答兒の時分には無暗に藥物によつて熱を下げやうとしても無駄であること、なるべく日當りのいゝ窓際か何かに横つて居ると熱は自然低下して行つて病氣も癒ること、斯ういふ

注意を近藤博士は澤山述べられた。

素人を相手に極めて通俗に話されるところに博士の用意が俾ばれて床しい。獨逸語や拉丁語で氣を遠くさせられること、思つてゐた彼は博士の碎けた分り易いお話を非常に有難いものと聞いたのであつた。

講演が濟んで了ふと博士を取巻いて種々の質問をされる婦人が多かつた、これを以て見ても博士の講演が一人よがりの講演でなく、慥かに手答へのある講演であつたことが分る。

講演會が終つてから、講堂へ通ふ廊下で成澤先生にお目にかゝつて來意を申し述べると先生はいろ／＼園の景況に就てお話し下さつた。樂園へは毎日四五百人の兒童が遊びに來るが多い時には七百人位になることもあるといふこと、日本橋や淺草邊からはる／＼と通つて來る兒童もあるといふこと、園内が廣いので二三十人も來たかなと思つて調べてみると實際は百人近くも來てゐるといふ

こと、雨の降る日でも百人位来て本館の前で遊ぶのであるといふこと、それ故雨降の時大勢の兒童の遊ぶことの出来るやうな廣い建物を建てる筈になつてゐるといふこと、小學校の生徒が教師に引率されて遊びに来るが日曜日だと一般の兒童が澤山遊びに来てゐるために、お關ひすることが出来ないう、日曜日以外の日だとお湯や何かを沸かして上げる事が出来るといふことなどを彼は伺つた。

彼は成澤先生と御一緒に、もう一度樂園を一巡してみることになる。「樹を植ゑる時期を失ひましたので日蔭が尠くて困ります。それで止むなく、あんな風に葎籠張りの日蔭が拵へてあります。秋になつたら街路樹を澤山植ゑつけることになつてゐます」と成澤先生は語られる。本館の前から植物園の方へ行く。こゝには松杉檜等の建築用材を始め、鉛筆の木やマツチの軸の木とか其外實用に適する樹木、花卉の類が栽培してある。この植物園のすぐ前にセメントで固めた大きな池が二つあ

る。地球池と稱するものである。直径五間大の二つの地球池は東半球と西半球とであつて、海水に擬して水を湛え（但しこの日は掃除した後とあつて水は乾してあつた）日本を中心とした世界の陸面を現はしてある、つまり陸地の部分がセメントで盛り上げてあつて、水面より上に出て居るのである。而してこの陸地にはペンキで各國の領土が塗り分けてある。この東西兩半球を一眼に見下ろす位置に富士山の形を模した芝生のスベリ山が隆起してゐる、富士山の頂上から、兩半球を睥睨しながら、迂り下りるなどは大いに痛快で、幼児をして不知不識の間に豁達な氣宇を養はしむることになるのであるといふ。スベリ山をぐるりとまわると、柿や李や桃や蜜柑やを植ゑた植物園がある。この植物園と直角をなす一線にはずつと小動物の飼養場がつゞく。最初に書いた如く、猿や鶏や兎やモルモットや山羊があるのである。是等の動物の檻の前には一錢づゝの餌が並べてある、木

の函の中に一錢銅貨を落し入れて、人參の餌を兎に與へてゐる嬢ちやんもあつた。土橋の傍の圓形の檻の中にある猿は成澤先生のお話に依ると、南洋の産ださうで非常に人なつくく、爪を持たないから少しも危険のない愉快な友達であるさうな、人が居ないと寂しがるといふから可愛いではないか、夕方になつて檻を出してやると犬と相撲なぞを取つて却々愛嬌があるといふ。南洋の猿の傍の檻には龜が一匹悟り濟して一寸も動かないでゐる。

本館の裏へ出て苗田の方へ行く、こゝはその内に養魚池にして舟を浮べることも出来るやうにするのであるさうな。本館の北側にある運動場には芝生や砂場があり、ぶらんこ、すべり臺、鐵棒、吊かん等の運動器具が備へてある。成澤先生のお話によると、ぶらんこが一番繁盛し、その次ぎにスベリ臺が最もよく繁盛するといふことであつた。

斯んなことでこの長たらしい記事を終りたいと思ふ。暑い中をあちこちと親切に御案内下さつた成澤先生に感謝の意を表して筆を擱く。(終)

風 の 夜

月も照らさず星もない
風のはげしい夜々々
よどほしお馬で人が行く、
夜のくらさにしめほさに。
燈あかりも消えた眞夜中に
なぜにお馬で駈けて行く。
樹が大聲で泣きさけび
お舟の揉まれる夜々々
足音たかく又ひくく
疾風はてのやうに馬で行く、
あちらへ駈けて行つちまふ——
とまた、こちらへ駈けて来る。